

の分を息貫へ葉王寺は今は勢多寺と謂ふなり、其の薬料の物を岡田村主姑女（まへめ）の家に寄せて、酒を作りて息利す。時に斑（ま）なる犢有り。葉王寺に入りて常に塔の基に伏す。寺の人擯ひ出せば、またなほ還来りて伏して避らず。怪びて他に問ひて曰はく「誰家が犢ぞ」といふ。一人「我が犢なり」と言ふ者無し。寺家捉へて、繩を著け繫ぎ饑ふ。年を逕て長大り、寺の産業に駆せ使はれ、歳五年を経時に寺の檀越岡田村主石人夢に見らく「其の犢牛石人を追ひ、角を以ちて掌き仆し、足を以ちて踰む。石人愕え叫ぶ。是に犢牛問ひて言はく「汝我れを知るや」といふ。答へていはく「覺らず」といふ。彼の牛放れ退き、膝を屈げて伏し、涙を流して白して言さく「我れは、桜村に有りし物部麿なり字は塩春と号ふ。是の人存けりし時に、矢を猪に中てずして、我れ當に射たりと念ひ、塩を舂きて、往きて荷はむとして、猪無きことを見る。ただし矢のみ地に立てり。里人見て咲ひて、号けて塩春と曰ふ。故に以ちて字とす。吾れ先に是の寺の薬の分の酒を二斗貸用 償はずして死にき。所以に今午の身を受けて、酒の償を償ふ。故に役使はるらくのみ。役はるべき年八年を限る。役はれて五年、いまだ役はれずして三年なり。寺の人 慈無く、我が背を打ちて追ひて駆せ使ふ。斯のはなはだ苦び痛むこと、檀越にあらざるよりは愍ふ人無し。故に愁の状を申すなり」とまうす。石人問ひて曰

はく「何を以ちての故に知る」といふ。牡答へて曰はく「桜の大娘を問ひて虚実を知れ」といふ。大娘は酒を作る家主、すなはち石人の妹なり」とみる。独大に怪びて妹の家に往き、具に上の事を陳ぶ。答へていはく「実に言の如く、酒二斗を貸用、いまだ償はずして死にき」といふ。茲に知寺の僧浄達並に檀越等、因縁を悟り、哀愍ふる心を垂れて為に経を誦むことを脩ふ。八年を遂し已りて去る所を知らず、また見えず。當に知るべし、償を負ひて償はざれば彼の報無きにあらざることを。あに敢へて忘れむや。所以に成実論に云はく「もし人償を負ひて償はざれば、牛羊驢鹿、驢馬の等きらの中に墮ちて、其の宿の償を償ふ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

女人悪しき鬼に点され食噉はるる 縁 第三十三

聖武天皇の世に、国挙りて歌詠ひて謂はく「なれをぞよめにほしとたれ あむちのこむちのよろづのこ 南无南无や 仙さか文さかも酒持ち のり法まうし やまの知識あましにあましに」といふ。爾の時に大和国十市郡菴知村の東の方に、大に富める家有り。姓は鏡作造なり。一の女子有り。名けて万の子と曰ふ。いまだ嫁はず、い

寺に所在。三上巻三十五縁。葉のたための費用として計上されているもの。延喜式・主税に諸国の薬分料がみえる(仮証)。僧尼合に酒、肉、五辛を疾病薬分とすることがみえる。それより推せば、薬分、薬分料、薬料などである、酒のための費用か。この費用が貸し出され、寺が利を得ていた。

一「息貫は、利息を払って借りる。二「は、借りる。三「らふは、借りる。四「らす」と対になる語。五「勢多」は郷名。六「物」とあるのは、薬分料が稲であったことを示す。七「未詳。本説話以外に所伝をみない。氏が岡田・姓が村主岡田は、名草郡巨来郷に存した村名。八「葉分料の稲を原料として酒をつくり、利息を生ませる。九「まはす」は、増殖させる意。十「本説話では斑文には意味が無い。十一中巻九縁。十二「塔の基壇。十三「未詳。本説話以外に所伝をみない。十四「本説話では、夢の中で動物が人のことばを発している。十五上巻十縁。十六「未詳。固形の塩を粉末にする意が。釈日本紀・十二所引撰津国風土記に、鹿に関して「春塩塗(春)とみえる。固形の塩としては、苦汁(苦)を除去するために燻製にした「堅塩(堅)が知られているが、それ以外にも煎煎による製塩において生産される固形の塩が存した。また、現代の食塩も空気中で固形化する。延喜式・主計上にみえる「破塩(破)も固形の塩であらう。延喜式・齋宮にみえる「塩曰は塩を舂くための器か。塩を準備したのは肉の腐敗を防ぐため。猪肉は、塩を加えたばあいは、脯(干)・醃(漬)・鮓(干)などにして食べる。三「延喜式・造酒司には、原料米一石から酒一斗七升八合五勺、とある。四「この数字

の意味するところは不明。五「檀越であるあなたでないならば決して愍れむ人はいないだろう。あなただけが愍れむ。六「なぜわかるの。七「桜村の大娘。八「岡田村主石人の姉である。九「妹が岡田村主姑女であり、桜大娘と称されていたことが、示される。十「妹は、姉、または妹。男の立場から女きようだいをいう。十一「夢の中で目非・檀越、無惑之人、故申・愁状とあつたよされた。十二「僧を統括する役職か。十三「同名の僧に関して次のような記事がみえるが、本説話の浄達と同一人かいは判然としな。慶雲四年(七七)五月、新羅より帰国統紀。和銅二年(七七)十月、藤原不比等に請せられて植槻寺にて維摩会を修す(扶桑略記)。三「死んでより高い地位の存在(たとえは、人へ転生したことを暗示する。四「原文「豈敢忘矣。どうして忘れたりしようか。決して忘れない。五「諸経要集・釈交部・債負縁所引成実論。成実論・六業品に拠る。

第三十三縁 今昔物語集・二十ノ三十七に書承。

三「以下の歌は、仏教語を多用しての戯笑歌。歌の歌詞それ自体に奇怪なものが含まれているわけではない。仏教というきらびやかなイメージを織りこんで、男たちが、女たちかみんなどおまえが好きなんだぞ」と、女からかみ半分で歌いかけたもの。語音の連想から連想へと展開する歌。三「おまえを嫁にほし」と言うのは、誰か。三「おれはまただぞ」とこのおれたぞ」と言っているみんなど「あむち」は、我がの敬称。「こむち」は、此(こ)の敬称。「よろづのこ」は、多くの人。三「おまえも、酒持つて。

